
涼宮ハルヒのSOS団

OB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒのSOS団

【ZPDF】

Z0802P

【作者名】

OB

【あらすじ】

キヨンは再び別世界へ。犯罪組織がいくつも存在する街で目を覚ましたキヨンは古泉とともに元の世界に戻る方法を探していく。

第一話（前書き）

まいしへお願こしあす。

第一話

まあ慣れちゃいけないのは解つてゐるが。
さて、俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は今鉄格子の中で手
錠をはめられながら過ごしている。
さつままで俺は自分の部屋にいたのだが、最高に落ち着く部屋に……。

「全く、困つたものですね僕も貴方も涼宮さんも」

鉄格子の外側にいる警察官の服を着た古泉一樹は相変わらずの爽や
か極まりない笑顔を俺に見せつけやがる。

「なあ古泉、今度もお前か？」

「まさか、僕はもう充分ですよ」

鉄格子を施錠していた鍵を開けながら古泉は言つ。

「涼宮さんに直接訊いたらいい事です、わあ行きましょうか」

古泉が差し出した手を俺は軽く振り払い、先を歩く姿に古泉はまた
あの笑みを見せつける。

やれやれ、今度は誰が仕組んだ事やら。

「ハルヒは何処にいるか知つてるか？」

「わあ？」

殴つてやるつか、そつ想つたくなる程爽やかな返事に俺は肩をすく

めた。

鉄格子がいくつもある部屋から出していくとそこは海外を思わせる住宅街。

霧が視界を遮るが見えない訳ではない。

「さつやとハルヒに会つて事情突き止めて帰るからな俺は」

「ええ、僕も同感です」

俺は古泉とともに街へと歩き出した。

今思えばさう簡単には思い通りにならない事だと解っていたはずだった……。

第一話

「僕は貴方が来る一週間前にこの世界にいました」

「何かわかつたのか？」

嫌というほど爽やかさが漂う古泉一樹に俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は訊ねた。

「ここは犯罪組織が多く存在しているようです、何やら噂によれば涼宮さんはボスだそうで」

「キツイ冗談だな。勘弁してくれ」

俺はとにかく広場の各場所に設置されたベンチに腰掛け、古泉と休憩している。
目の前を通りて行く高価なドレスを着飾つた貴婦人がいれば、ゴミをあさるホームレスもいる広場。
ここはいつの時代だ？ ましてや誰が創った世界なんだ？

「誰がここでやれって言った！？」

俺の耳が一瞬雑音をかき消されたように静かになった。
そして再び雑音が耳に入ると、次は貴婦人方の叫び声と激しい銃撃音。

「な、なんだ？」

「隣町の組織がここに組織に宣戦布告のようですね」

古泉はベンチから立ち上がると首に下げているホイッスルのような物を口に咥え、高らかに鳴り響くなんともうるさい音が俺の耳を刺激する。

「おい、サツだ！！ 逃げるぞ！」

物騒な銃器を胸元に隠した怪しい連中は慌てて縦に長いリムジン車に乗り込むのが俺の視界に入った。

俺と古泉がいる広場のベンチから少し離れた出入り口には一人の太った男が空を見上げた形で倒れている。
それを乱暴に運んで行くこの街の警察官達。なんとも重そうである。地面には引きずった跡がきつちりと血で残っている。全く、生々しい。

気付けば古泉はその現場まで向かっていた。
俺もゆっくり追いついて古泉の所まで向かう。

「意外と近くにいるかもしれませんね」

「ハルヒか？」

「ええ」

古泉の手には血が付着した小さなバッジ。
見覚えのある単語だ。

「……こんな世界でもこんな創つてんのか？ あいつは

そう、『SOSU団』と刻まれていた。

「すぐに会えますよ取り引きで応じると思います、涼宮さんなり」

「多分な……」

俺にこのバッジを差し出せりとする古泉に俺は当然拒否した。
大事な証拠だらうよ古泉。

笑顔の古泉に俺は無視する他何も無かつた。

第一話（後書き）

まいじくお願ひします。

「涼宮ハルヒ?」

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は警察官の服装した古泉一樹と一緒に色んな輩が集まる酒場にいる。

怪しい賭け事から、ただ仕事疲れに飲みに来ている人までそれはそれはたくさん。

そして店主である白髭の男に聞き込みをしている古泉。

誰に対しても爽やか極まりない奴だ。そこがなんとなくムカつくが。店主は透明色のグラスを白い布で拭きながら少し間を空けて答えた。

「……ああ、SOS団のボスの女だよ」

「そうですか。それで何処に?」

これが見ず知らずの一般人だったら何も教えてくれなかつただろうな、古泉が警察官の姿でよかつた。

怪訝そうな表情の店主だが答えない訳にはいかないだろ?。

「街の入り口だ。悪いがいくら警察でも詳しい事は言えん、こっちにも事情があるからな」

古泉は感謝の言葉を残し俺と一緒に店の外へと出る。

「いいのかよ?」

「さあ、ですが情報はもうえたのですから先程よりはわかつてきました」

「へえ、そうかい」

俺には全く理解できないな。

外はもう暗い。街を歩く住民は皆自分の家に引っ込んでいる。物騒なんだから当然なんだろ？

俺が古泉より前に足を踏み出した時だった。
目の前にSOS団と刻まれているバッジを胸に付けた厳つい男が…
…五人。

その後ろには真っ黒な高級リムジン。

「何か？」

古泉は微笑みをつけて厳つい男に余裕の表情。
どんな相手でも笑顔だな古泉。

「ボスがあんたらに用がある、しつかし警官と囚人…変なコンビ
だな、まあ乗れ」

マジかよ。

夏でもないのに汗が滲み出でくる。

俺は厳つい男達に押されながらリムジンへと入れられてしまう。
車内は広く俺は快適空間に少し驚いたが古泉はいつもと変わらない。
ホントむかつくぜ、古泉。

真っ白な座席に俺と古泉、そしてその前に座る厳つい男一人。

「ボスの女を探してゐみたいじゃねえか」

サングラスをかけた厳つい男はこのメンバーの中で多分年長者と思われる。

大体四十代だと思いたいが、どうだろうか？

「涼宮ハルヒ、随分困った嬢ちゃんだ。そんな女を好きになつたボスはおかしいぜ」

まあ そうだろう。

ハルヒを好きになる男は大体変な奴だ。
俺の隣にいる古泉は、

「僕はおかしくないですよ？」

爽やかに微笑む。

充分おかしいぜ、古泉。

「毎晩毎晩飽きもしないよな、そんなにいいのか……あの女」

サングラスの男の隣に座つている三十代の凛々しい男は無表情のまま、

「よっぽどいいんだ。ほつとけ」

隣から何故だか血管が切れるような音がしたのだが気のせいだろうか？ うん、気のせいだろう。

横を覗くのはやめておこう。

ハルヒを好きになる口クでもないボスの顔を拝まないとな。

「……」

厳つい男達の会話を黙つて聞き流しながら何処へ連れて行かれるのかもわからない俺は車窓から真つ暗な街を眺めるしか無かった。

第四話

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は暗い路地裏を歩いている。その隣には警察官の服装をした古泉一樹。

前と後ろには厳つい男五人。

俺たちの足音以外何も聞こえない静寂さと少しの恐怖感が背筋を冷やす。

「入れ

路地裏の最奥に到着すると真っ赤なドアがあった。

少し鉄分の臭いが鼻につくが俺は気にせず開けられたドアの向こうへと足を踏み入れた。

感想を手短に言うと狭いな。真ん中の高級なソファーにはボスらしき人物が座っている。

俺はしつかりとその人物と目を合わせる。

「く……

「狭いけど、ゆっくりしていいですよ」

「おや？」

古泉は見覚えのある顔だったのだろう。そりやそうだ、俺だってある。

この世界はどうなってんだよ……。

「国木田ああああー？」

「何？ どうしたの？」

驚く事もしないこといつぱやういつ奴なんだ。

「黙れ！ ボスの前で失礼だらうが！！」

後ろにいた厳つい男に俺は頭を殴られてしまつ。痛いぜおつせん…

それを落ち着いた表情で眺めている国木田。どうしたもんか、この世界。本物じゃないのがせめてもの救いだ。

「面白いね君、とこひでそここの警察官は何用なの？」

「……」

微笑む表情のまま無言でいる古泉。何か言つてくれ。

「……ここは誰が創つたのでしょうか？ 涼宮さんではないですね、彼でもない、誰なのでしょうか？」

「あいあい、国木田の質問に答えてないぞ。何故か冷ややかな殺氣が俺の背中を凍らせている。

「あなたを恨む気はないのですが

「何？」

古泉は内ポケットへと手を入れ一歩右足を踏み込んだ。古泉、何をするつもりだ？

「おい、古泉？」

俺が声をかけたと同時に横を通り過ぎた古泉はテーブルに足を乗せて国木田の額へとリボルバーの銃口を突き付けていた。

「涼宮ハルヒを解放してください。その代わり警察はこの組織がやつてきた犯罪、取り引きも帳消しにし薬物の売買も目を瞑りましょう」

「すげー」取り引きだな。

古泉、そんなにハルヒの事が好きなのかよ。

銃口を目の前にしても表情を変えない国木田はしじらく口を開く。

「……無理だよそんなの、彼女はそんな程度の取引じゃ釣り合わない」

そんな程度つて国木田、ハルヒはそんな程度でいいと思つぞ？ ゼひそうしてもらいたい。

国木田はリボルバーを手で振り払つと立ち上がつた。

「帰つてもうつて」

何も動けなかつた国木田の部下はすぐ「俺とテーブルからゆつくり足を地面に下ろした古泉を外へと引っ張り出す。

「運が良かつたな、機嫌が悪けりや殺されてたぜ特に警察官

「ええ…… そうですね」

冷めた表情で目を細めている古泉に厳つい男は後ずさる。

足早にアジトへと戻つて行つた男に背を向け俺は古泉と並んで歩いた。

結局ハルヒの姿ざるか声すら聞けないまま返されてしまったわけだが。

「どうする、古泉」

「SOS団と対立している組織があります。そこに貴方が入るんです、そして私は警察側で援助します」

いつもの微笑みに戻つて困難な事を提案した古泉に俺は眉をひそめた。

「そんな簡単に入れるのか？ 命の保証なんて無いだろ？ が、もし失敗したらハルヒに会つ前にあの世行きだぞ」

そうかもしだせんね、と呟いた古泉。

俺は五歩進んで古泉が立ち止まつた事に気付く。

後ろを振り返ると微笑んだまま古泉は顔を俯かせていた。何を考えていたのか、俺はその時わからずにいたのだ。

あいつの行動はおかしいのだもつと早く気付けばよかつたのだと。

続く。

第四話（後書き）

あまり面白くないかもしませんがよろしくお願いします。

そういうえば俺（周りからはキヨンと呼ばれている）はなんで牢獄にいたのか気になるのだが、隣にいる警察官の姿をした古泉に訊くべきだろうか？

それを察したかのように古泉は微笑みながら、

「知らないでもいい事だつてあるかもしません」

訊いた俺が悪かつたよ。

俺は今ボロいアパートの部屋にいる。

四階の部屋で家賃は日本円にして一万円。

安い分部屋はボロボロだ。ベッドは固いし脆い、それ以外キッチンもトイレもお風呂も全部共有。

「家賃はこちら側が払います」

そりやそりだらう。

俺はこの世界に巻き込まれてるんだからな。

「警察署で色々と準備をしますのでその間貴方は休んでいてください

い

「はいよ」

今にも壊れそうな木製のドアが閉じられ俺は一人となつた。さて、外に出ても物騒だ。となると本当にここで大人しく休んでいいといけない。

机に置かれたテレビに向かつてリモコンの電源ボタンを押してみる

が反応は無し。

「……」

もういい。本当に何なんだ、この部屋とこの世界といい俺は一体何処の世界にいるんだよ。

苛立ちが止まらない。今にも何かを壊したいのだが……。

その時、ドアを叩く音が三回ほど聞こえた。

「はいはい、って……」

俺はすぐこでドアを閉めたいと思つたね。
目を細めつつ俺は腕を組んで壁にもたれた。

「何用で？」

本当の世界ならまあ自宅に来ても嫌とは思わん。だが、

「やあ」

「うううのボスがわざわざ一人で来るんだから重要な話なんだ
うう」

国木田、今俺は嫌だ。非常に困る。

マイペースに笑つて俺がしかめたのを見ている。

「まあね警察官が来るとは思つてなくて、ちょっと遅れたけど話があるんだ。入つていい？」

「……手短にな」

小さいテーブルを挟んで俺は体重の重い奴が座れば簡単に折れるであろうイスに腰掛けた。

「彼女と会つて何をするつもりなの？」

「何つて話訊くだけに決まってるだろ、何も無ければそれで終わり俺らの事情を知っている奴をまた探す」

「そうなんだ、でも残念だけど彼女には会わせられない。ありがとう、キヨン君？」

「……馴れ馴れしく呼ぶな

こいつは国木田の姿をしているだけで本物じゃない。まったく他人だ。

国木田が去つていいくのを見届けた後、俺は大きく息を吐く。涼宮ハルヒとそういう関係だというのなら、なんとも苛立つ。どうなつてんだろうね……ホントに。

「俺は嫌いだな、この世界

「嫌い……ですか？」

時刻ははっきりとは知らない、この部屋に時計なんて無いんだからな。

だが夕方であることは確かだ。

古泉は戻ってきたかと思えば物騒な武器が入った鞄を持っていた。国木田が来た事は言わないでおこう。

「頭がおかしくなつてくる。お前は何にもならないのか？」

「ええ、なりそうですね。涼宮さんが近くにいると解れば我慢はできます」

訊いた俺が馬鹿だった。

「で、どうするんだこれから」

「UNION団を外部から崩していくまじょうか、貴方も手伝ってくれますね」

俺はまた大きく息を吐いて目を細めた。

「できる範囲でな、ハルヒに会つて事件が解決したら嬉しい」

「ええ……そうですね」

続く。

第六話

「アベレージ？ なんだそれ、本当にそんな組織がいるのか？」

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は今にも崩れそうな木製のテーブルとイスの前にいる。

古泉によればアベレージという組織はかなりSOS団に恨みをもつてているようで名前を聞いただけで暴れるという激しい組織だ。そこに俺が入るなんて大丈夫なのか？ 特に命は保証できるのか？

「ええ、何かあればこちらが何とかします」

余裕の表情で微笑む古泉の前には拳銃が積まれていた。リボルバーがほとんどだろうか、古泉はその中から一挺を俺に差し出す。

「我々警察が携帯しているM37エアウエイトといわれる物です」

「俺がこんなのは持つてて組織に疑われないのか？」

もう少し警察から離れた武器にしてくれ。

俺の注文に古泉は爽やか極まりない笑顔で今度は別のリボルバーを手に取る。

「パインの6インチです」

「リボルバーが多いな」

他に拳銃は無いのか、とテーブルに積まれた銃器を漁る。

どれを見てもリボルバーばかりで俺は少々眉をひそめる。

「無いよりかはマシですよ」

それもそうだな。

俺は古泉が用意してくれたホルスターを腰に装着し、パインソントやらをそこに入れる。

「弾はいくらでもこいつらで用意しますので安心してください」

「そうならないように努力する」

古泉の笑顔を無視して早速俺は本題に取りかかる。俺は「古泉は笑顔のまま状況とこれからを察したかのように」と思つ。それを察したかのように古泉は笑顔のまま状況とこれからを説明してくれた。

「SOOS団の協力者をまず何とかしないといけません。貴方がSOOS団を敵視しているという事をアベレージにアピールするには……消す、もしくは刑務所送り、でしょか」

「刑務所送りにしたらどうなるんだ?」

古泉は目の前にあるリボルバーを手に取る。その銃口は俺に向けられた。何の真似だ?

「犯罪組織に荷担する事は法令で禁止されています。刑務所に入つても銃殺刑ですね」

金属を叩く音だけが響く。

弾が入つていない、引き金を人差し指で押さえている古泉を俺は睨

んだ。

「今日、深夜に決行。どうやるかは貴方次第ですよ」

古泉が部屋から出て行くのと同時に俺は全身の力を抜いた。ハルヒと会うだけだというのにこつも複雑になつていくとは、しかもどんどん組織の中に俺は巻き込まれていく。

古泉が何とかして俺はただハルヒと話して終わる、それでいいはず。

「それでいいだろうが……」

誰もいない部屋で俺は呟いた。

このアパートの一階には自動販売機がある。

俺が何か飲み物を求める階へ下りようとした時だ。

自然と足が止まり、三階と四階に繋がる階段に誰かが立っている。

「……長門か？」

顔はキツネのお面で隠れて見えない、黒いフードを被つて髪も見えない。

だが、無というものを感じさせる雰囲気は長門のようには思える。

「それは誰？ 私は周りから情報屋と呼ばれているそれ以外名前は無い」

声は長門のものだ。

「あー、その情報屋が何用だ？」

俺が質問して五秒ほどが経つと情報屋は、

「涼宮ハルヒは今酒場にいる。会うのなら一人で行って……」

そう呟いて三階へ繋がる階段を足音も無く下りて行った。

俺は急いで後を追いかけたが何処にも姿が見えず、まるで幻覚を見ていたかの様だ。

このアパートの外に出てみるが、あの情報屋はいない。

ここから見える公園の時計台は午後七時ちょうどを針が差している。

古泉が来るまでにまだ時間はあるのだが、どうしようか？いや、考へてゐる暇はない。とにかくあいつの言つ事を信じてみよう。

俺は酒場へと続く平坦な道を走り出す。

続

第六話（後書き）

まいじくお願ひします。

平坦な道を走つて五分。俺（周りはキヨンと呼ぶ）は少々の息を切らし、酒場の前にいる。

ここに涼宮ハルヒはある。

あの情報屋が言つてゐる事が確かだつたらだが。

俺は扉の前で深呼吸、そして、手でゆっくり扉を押す。

「……ハルヒ」

いくつもある丸いテーブルと安物のイスが並ぶ店内の奥には全く違つ高価なテーブルとイスがあつた。

そこに座つてゐるのは真つ赤な薔薇のようなドレスを着た……涼宮ハルヒ。

その前には先ほど俺に情報を与えたキツネ面の長門らしき人物。イスから立ち上がつたハルヒ。

ドレスに切れ目があり、そこから見える細い脚線。

現実世界より長い艶のある髪、あの力チューシャはしていない。

俺はどこを見ていいのか分からなかつた。

そして、彼女は少女ではないと思えた。

俺より年上じやないのか？ それほど彼女は、ハルヒは妖艶に見えたのだ。

「あなたが言つていた人つてアレの事？」

ハルヒの人差し指が俺に向けられる。

しかもアレ扱いとは……。前言撤回だな。

俺はすぐにそこへ早歩きで向かうと、

「これからどうするか……それはあなた次第」

情報屋はその場から去ってしまった。

追いかけようかと思つたが、今はそれどころじゃない。

ハルヒの鋭い視線が俺を睨む。

その表情は俺を敵視しているかのようだ。

「……」

「それで、何用？ どうでもいい事だつたらあんた殺すから」

物騒な言葉だ。

俺は息を吸つて、

「ハルヒ、俺はこここの世界の人間じゃない。頼むから元の世界に戻してくれ、それとこの世界を創つたのはお前なのか？ それとも誰か協力者がいるのか？」

ハルヒの肩を掴んで訊ねる姿に周りが騒ぎ始める。

「……あんた何者なの？」

真剣な眼差しが俺を捉える。

まるで何かを知つているようだ。

「頼む、教えてくれ」

ハルヒが何かを言おうとした瞬間だ。

店の外からそれを遮る銃声。

俺は思わず後ろを振り返った。

扉が思い切り開けられたと思えば血まみれの男がやつてきたではないか。
また抗争か？

「お嬢、逃げて下さい！ 警察が………？」

その男の頭にリボルバーが突き付けられた。

「情報を『えたのは長門さんですね？』

「……古泉」

「古泉君！？ あつ」

「言つてしまつた、まるでそのような表情でハルヒは口を両手で押さえた。

怪しく微笑む古泉を俺は睨みつける。

「襲撃は深夜じやなかつたのか？」

「それはこつちのセコツですよ、涼山さんと唯一話せる時間でしたのに」

それで深夜に襲撃するなんて計画したのか。

「前回もやつでしたが今回もまた長門さんに邪魔されるとは……思いました」

血まみれの男の頭部から銃口が離され、古泉は俺の方まで歩いてくる。

「やつぱりあいつは長門か」

「ええ、それと時間はかなり違いますが計画は実行しますよ」

なんだって？ 今はそれどころじゃない。

ハルヒに事情を聞いてさつさと俺は元の世界に戻らないとダメだ

る。

古泉が軽く右手を擧げると一斉に古泉と同じく警察の服を着た奴らが現れた。

「彼と涼宮さん以外ここにいる全て銃殺刑とします」

酒場の店長も数人に抑えられ、他の客人達も皆連行されていく。

「あとは、ここを爆破しますので避難しましょうか」

古泉は微笑む。俺はあいつの行動がおかしいと今更だが気付いた。ここにハルヒはいる。もうそれだけでいい。

こんな計画も必要ないはずだ。

なのに、古泉は何故こんな事をする？

「これが僕の仕事ですよ」

こいつは本当に現実世界の古泉なのか？

長門、ハルヒ、古泉……朝比奈さんはどこにいるのだろうか。彼女だけはまだ会っていない。

ハルヒの手を取り誘導する古泉。

「キヨン」

「えつ？」

突然ハルヒの口から俺を呼ぶ声がした。
それを止めるかのように古泉はハルヒの腰に手を添え急がせる。
俺は肩をすくめて後を追う事にした。
いずれ分かる事だ。
何がどうなつているのか……が。

「おー、どうこう事だよ、古泉」

俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は古泉に對して苛立つて
いた。

ハルヒから事情を聞かなければならぬ」というのに、肝心のハル
ヒが来ないといつ。

「その代わりといつてはなんですが、アベレージのボスが貴方に会
いたいそつです」

代わりになるわけないだろつ。

「どうぞ」

古泉が古びたドアを開けてそのボスとやらを呼ぶ。

「失礼します」

俺は目を限界まで開く。

聞き覚えのある天使のよくな声。

その姿はまさに天使。

長い髪、いや全身からいい香りがした。

「朝比奈さん……？」

「はい？ 確かにそうですが、まだ自己紹介もしていないのに知つ
ているんですか？」

「あ、ええまあ」

朝比奈さんが犯罪組織のボス？ どんな世界だよ。

「それでは僕はまだ用事があるので」

ハルヒをどうするつもりなんだ？ あいつは。古泉がアパートの部屋から出て行つて数分の沈黙があつた。そして、

「キヨン君」

「えつ？」

俺だつてまだ自己紹介をしていない。なのに何故俺のあだ名を知つている？

「……」は別世界といつ事は知つていますね。涼宮さんも長門さんも古泉君も現実世界の人です

「……だったら、誰がこの世界を創つたんですか？」

朝比奈さんは黙つて首を横に振つた。
知らないのだろう。俺は少々肩を落としたがSOS団が皆本物だ
という事だけでも安心だ。
しかし不思議だ。

「どうしてハルヒも長門もわつわもそつですけど朝比奈さんも初対面みたいな発言を？」

「私の場合は古泉類じばれないよつこじつこだけです。涼町さんと長門さんはわかりません」

「そうだらうな。

俺は久しぶりの対面に心の底から喜びじばらう朝比奈さんと対談した。

「涼町さん」

「何、古泉君？」

「彼の事が気になりますか？」

「そんな事……ないわよ」

「やつですかね」

「当然……よ」

「キヨン君

他愛の無い会話が終わりかけの時、突然朝比奈さんは真剣な表情を俺に見せた。

「古泉君とはあまり近くにいない方がいいと思います」

何をいきなり？ 確かに近頃のあいつは様子が変だ。

昨日なんて酒場を火の海にさせた挙句そこにいた奴ら全員を銃殺刑にもした。

今日はハルヒにも会わせてくれない。

だが、あいつといいところちも困る。

古泉がいればハルヒもいる。

「どうしてですか？」

「……古泉君はおかしいです。この前も平氣でSOSU団の部下を銃殺したり、少しでも犯罪組織と関わりがある店を焼き払って経営者も皆死刑にされました」

「……」

言葉が出てこない。

「完全にSOSU団のボスを孤立させるつもりです」

「国木田……はいこの世界の人間ですよね？」

「はい、とはいえませんが、多分そうだと思います」

自信のない声と返答は俺に不安を募らせる。

「時空が捻じれていますから、もしかしたら人格だって変わっているかもしません」

「……」

じつして俺は朝比奈さんとの面談は終わった。

気付けば夕方。

俺はまだ帰つてこない古泉とハルヒをひたすら待つていて何をやつてているんだか。

外へ出てみようか？ もしかしたら長門がいるかもしません。僅かな期待を胸に俺はアパートから出て行く。

霧が薄暗く見事に街の景色をぼやけさせていく。

夕方を歩いている奴なんてどこにもいない。

夕方になれば皆何処かの建物に隠れている。

俺だけがこの街にいるみたいだ。

この街の中央にある広場に行つてみても誰もいない。

時計台の針は五時を回つていて

遠くに行つても物騒なだけだ。

帰ろうか、俺がそう思つて後ろを振り返る。

「……」

キツネのお面を被つた奴がそこにいた。
フードを頭から覆つていてる為髪も見えない。

「長門」

「違つ

「何が違つただ？　お前は長門だ」

「……あなたがそう呼ぶのならそれでいい

俺は肩をすくめた。

「……」で待つて、そうすれば涼宮ハルヒも古泉一樹も来る

「本当か！？」

「ただ……」

ただ？　俺は長門の返答を待つた。

「あなたが耐えればの話

「どうこう事だ？　お、長門！」

長門は霧に混じるように姿を消した。

再び一人となつた俺は呆然と立ちつくす。

本当に来のだとしたらこれほど嬉しいことはない。
しかし、最後の耐えるとはなんだ？

「あの時のガキじやねえか

「そのよつだな

「！？」

俺に声をかけてきたのは黒スーツ姿の厳つい男と凜々しい男。
「いつらは確かSOSの団。国木田の部下じゃないか。

「あの警察官はいなこよつだな？」

「……ちよつと付き合え」

一人の力は半端なものじゃない。

両脇を掴まれ俺はそのまま車の中へ乱暴に突っ込まれる。

「おいおこ、何のつもりだよーー？」

「ボスがまたお呼びだ」

「国木田が？」

俺はまたあいつの所へ行くのか……。

続

第八話（後書き）

まひじくお願ひします。

薄暗い地下で俺（周りからはキヨンと呼ばれている）は上半身を裸にして両腕を縄で縛られていた。

吊るされた状態で全く身動きができない。

目の前には国木田とその部下五人。

「彼女はどこ？」

国木田は少し急いでいるような喋り方で俺に質問する。

「それは俺が知りたい、古泉がハルヒを連れて消えたんだよ」

「……彼女と君を見たって言う部下がいるし、簡単には信用できない」

国木田は部下の一人に指で合図のようなものを送っていた。

「あのな、好きでこの世界にいるわけじゃないぜ、はやくハルヒに事情を聞いて帰るそれだけだ」

「彼女が創ったこの世界は嫌いかな」

「今なんて言った、ハルヒがこの世界を創ったのか！？」

「僕が今知りたいのは彼女がどこにいるか、なんだけど」

部下の一人はいつの間にか持っていた水色のバケツを構え俺の目の前にやってきた。

「おいおい、何するつもりだよ？」

「ここは地下つて昼夜関係なく結構寒いからね、ちょっと厳しいかな」

バケツが俺に向かって飛んでくる。

その中にはブロックアイスとそれにより冷えた水が。

まともに俺の肌へと降りかかる冷水と氷が一瞬にして体温を奪い、急激な寒気が俺を襲う。

「うおっ！」

俺は思わず体を震わす。

「キミが答えない限り、終わらないからね」

国木田は田を細め、俺から遠ざかっていく。

「しらねえつて……つ！」

俺の顎を思いっきり掴んできた厳つい男。

「坊主、早く言わねえと助からないぞ」

「だから……知らないって！！」

間に答えた瞬間、俺の顔が右に自然と向いていた。

口腔内で鉄分の味が広がる。

地面に俺の血が飛び散った。恐らく鼻血か、唇が切れた部分からの、だろつ。

後々痛みがくる。

「かける」

厳つい男が離ると、他の奴が冷水と氷が入ったバケツを持ってこつちに来た。

俺の顔から至近距離で降りかかる。

「！？」

息ができないほど苦しく、俺は思わず両手足を動かすが全く意味が無い。

氷の破片が俺の顔を傷つけ、先ほど殴られた痛みも麻痺している。ようやく俺は息ができるようになり、思いきり深呼吸を始めた。

「どうだ」

「ゲホッ、ゴホオ！！ はあはあ……」

この世界にただ強制的に呼ばれて、周りに振り回されて、それでこの仕打ちだと？

あまりにも理不尽すぎる。

長門の言った通りこれに耐えればハルヒは来る。

本当にそうなのか？ 何故俺は長門を信じた？

長門が虚言しているだけかもしれないというに……俺は

ああ、寒い。俺の体は完全に麻痺している。むしろ熱く感じるのだが。

国木田……あいつは何かを知っている。

ハルビがこの世界を創つたと、言つていた。

本当にそうだとしたら、とんだ茶番だ。

俺はその為にこんな事をされているのなら簡単にはあいつを許せない。

「なに黙り込んでいる」

厳つい男はまた俺の顎を掴むと今度は下から拳が、血液だけが飛び散る。

今の俺に痛みなんてない。

頭の中が空っぽになつたような感覚が俺を襲つていて。

「これ以上やつても意味がないな。おい、やれ」

「！？」

「どつちにしる、この坊主が生きて帰れるわけがないんだからな」殺されるのか？ 俺は。

嫌だぜ、こんな理不尽な死に方。

「すぐに殺すな、まずは足を狙え」

厳つい男以外の部下四人はリボルバーを手に俺を狙つている。

「やれ」

地下に破裂音が響き渡り、

「！？」

俺の足に麻痺を忘れるほど強烈な痛みが広がつた。下半身の全てから力を失うほどだ。

「次は、肩だな」

厳つい男の指令通り、次の部下が俺を捉える。

「やれ」

また同じように破裂音が響く。

「つう！？」

何がが切れるような、弾けるような音が体内から聞こえた。血液が俺の顔に付着。

上半身も同様力を失う。

俺を立たせているのは天井から両手を吊るす綱だけだ。

「腕

厳つい男の冷めた声が耳に入つてくる。

必死に力を振り絞つて顔を上げ、目の前にいる全員を睨む。

「やれ

腕が千切れるんじゃないのか？ それぐらいの衝撃が右腕に伝わる。

そして、俺の体力がもう限界だ。

万歳をしている腕から流れてくる自身の血。

その血が俺の口へと入つていく。

ああ、もう。顔を上げる力も残っていない。

「頭

死ぬのか？ 本当に。

ヤバいなんて思えない。

ただ、理不尽な死に方だ。

「……ホントに」

「ホントについて何が？」

女の声。

聞き慣れた声だ。

「！？」

「お嬢！？」

堂々と歩くような足音が耳に届く。

「その銃、今すぐ下におろして！」

俺の視界から見えたのは地面に落ちたリボルバー五挺。

それ以降、何が起こったのか俺はわからない。

いつの間にか気を失っていたのだろう。

あの声は確かに涼宮ハルヒだった。

長門の言つていた事は本当だ。

信じてよかつたのか、それとも元々ハルヒは俺の所に来るつもり

だつたのか。

もしそうなら部屋で呑氣に待つていた方がよかつたのか？

そんなわけないよな?
続。
長門、ハルヒ……。

今、俺（周りからはキヨンと呼ばれてる）は何処かの部屋にいる。

ベッドで仰向けのまま蛍光灯だけがある天井を見上げた。

その視界の隅に見覚えのある少女。俺は少し右に首を動かす。

「ハルヒ？」

腕を前で組んでは俺を見下ろす赤いドレスを着た少女。そう、涼

富ハルヒがいた。

「ちゃんと生きてるわね、キヨン」

何かを企んでいるかのように喜ぶ声。だが、表情は優しく微笑んでいた。

「ああ、俺生きてるんだな……」

ハルヒの手が俺の頬に当たると軽い痛みを感じ、生きている事を理解する。

「古泉は？」

「あんたが借りてるボロアパートにいるわよ」

「そうか……で、二人で何処に行つてたんだ？」

「何よ、あんた知りたいの？」

「当たり前だろ、そのせいで俺はこんな目に遭つたんだ」

ハルヒはベッドに座り俺から背を向ける。

「……教会よ」

「教会？」

結婚でもするのかよ、と一言呟くとハルヒは黙り込んだまま返答がない。

「ハルヒ？」

「そんなわけないでしょ。それよりさつぞとの怪我治しなさい」
そりゃそうだ。

ハルヒはベッドから体を離し、立ち上がった。

「しづらー古泉くんとアパートにいるから、もし何かあつたら有希に言って」

「は？」

「……」

ハルヒの後ろにはキツネのお面を被つたあの長門がいた。
俺は思わず体を起こさせる。

すると、雷のような衝撃が体中に響き渡り俺は思わず叫んでしまう。

自分の体をよく見ると、ほとんど包帯で巻かれているのだと気がつく。

あんなに銃弾受けて生きてんだからす」「よな……俺。

ハルヒが帰つてからすぐに俺はドアの前で突つ立つている長門を睨む。

「長門、お前があそこにいればハルヒに会えるつて言つから待つていたんだが、拷問されるとか聞いてないぞ」

「耐えた？」

「……耐えたとかじやない、殺されるとこひだつたんだ」「SOS団に行かなければ涼宮ハルヒは来なかつた」

「？」

どういう事なのか俺は睨むのをやめて自然体で長門の話を聞くことにした。

「あのまま戻つていれば貴方は古泉一樹に殺されていた。涼宮ハルヒは貴方がSOS団に誘拐されたと思い貴方を救助」

「古泉が俺を？」

俺は頭を抱える。

巻き込んだいで、今度は俺を殺そうとしているのか。

ハルヒも古泉も何を企んでいるのやら。

「なあ、ハルヒがこの世界を創つたのは知つてたのか？」
「創造したのは確かに涼宮ハルヒ。だけど、実行犯は……」
そこまで言って長門は黙り込む。

重々しい沈黙が流れてから一分。

俺は声をかけようか、いや、まだ待つ、そつ自問自答していた。

「……歩ける？」

「よつやく口を開いたかと思えば全く関係のない事を。

「実行犯が誰なのかを話してくれるんじやなかつたのか？」

「SOS団、国木田が来る。あなたを殺しに」

おいおい、冗談じやない。まだこんな状態で逃げれるわけないだろ。

立ちたいのだが力なんて入らない。

部屋の外側から聞こえてきた階段を上がるよつな足音。

どうやら部屋のすぐ外は階段があるよつだ。

「逃げる場所なんてないぞ」

「……選んで」

「？」

長門は俺の前に寄つてくると、キツネのお面を外した。今まで少しばかりは疑つていたが確かにこいつは長門だ。今、顔を見て確信を得た。

「一つ、貴方の代わりに私が国木田を殺す」

いきなり物騒な事を言つ長門。

「一つ、ここに拳銃がある。これを使って貴方が殺す」

どつちにしろ殺害の他ないだろ。よつ。

「選んで」

銃の扱い方なんて知らないし、もし仮に国木田を殺してしまったら……。

朝比奈さんが言つた通り時空の歪みで性格が変わつてゐるだけの国木田だったら、もう取り返しのつかないことになる。

俺自身でどうにかできるのか？ 怪我だらけで動くのも難しい。いや、国木田を生存させる確率があるのは……。

「俺がやる」

「……」

長門は返答を聞いた瞬間その場から消えてしまつた。

拳銃を残して

「 うそ、アガ開かれる

卷之三

田常会話をする時と変わりない表情で国木田は俺を見た。その手には明らかに拳銃があつた。

そして、俺の手にも拳銃。

「君から彼女の居場所を聞いたって意味無いからね、だからこいつを殺しにきたんだ」

— 1 —

「ヤバい、呼吸ができない。震えているのが一目でわかる
この世界とそろそろさよならしようつか？」

国木田が俺の傍に寄ってくる

金口が唇に触り机が暗い。少々の勢いで机を一歩踏み出したら、机の上に置かれていた二の恐怖感

ハルヒ、長門、朝比奈さん、なんで俺はこんな目に遭うんだ？
古泉、お前の今までやつてきた事は何なんだ。俺を殺してまでハ

川ヒカelseyのかた

例え目の前の全てが本物であらうと偽物であらう関係無い。

「アキラかー！」

俺は叫んだ。

引き金を思いつきり人差し指で押し込むと耳障りな破裂音が部屋中に響き渡った。

ま、ま、同じ寺で波瀾萬丈が重なる。

左側の頭部に強烈な揺れと

空虚の頭部に強烈な拍打の雷撃が走る
思わず俺はベッドに倒れ込んでしまう。

「そつく」

頭を抱えながら今の状況をしつかり視界に映す。

目の前に国木田はいなかつた。

力を振り絞つてもう一度上半身を起こすと、勝手に視界は床の方を映した。

そこにはお腹を両手で押さえつけてうずくまつている国木田の姿。どうやら生きているようだ。安心感で力が抜けそうになる。

「国木田、しばらくそうやつて頭冷やしてろ。他の奴らと一緒に元の世界に帰らないといけないしな」

あー、頭がおかしくなる。

いくら掠つたとはいえ痛い事に変わりない。

「ハルヒと、古泉の所に行くか……」

壁に手を当てゆっくりと部屋から出ると次は階段。ため息が出る。

「今銃声音が……」

ふと、外から声が聞こえてきた。

「馬鹿、マフィア同士の抗争に決まってるだろつー。危ないから近づくな」

何やら制止するような声も。

俺は一段ずつお尻からおろしていく。

その間も一人の声は聞こえる。

半分くらいまで到達すると、ようやくその一人の足が見えてきた。

「やっぱり怪我人がいる」

「こらー！」

聞いた事のある声だ。ハルヒに似ている。

もう一人はまだのおっさんだらうな。

階段の近くまで寄つて来た一人の少女が見えた。

「……ハルヒ？」

なんという事だ。ハルヒにそっくりな少女が目の前に。

ロングストレートの茶髪。強気な表情。整った綺麗な顔立ち。ワンピース姿。

「先生、この人マフィアっぽくなつ多分この市民よ。助けてあげてよ」

「本当か？」

「疑いながらも近づいてくる隕面のおつわん。

白衣を着てているところを見るとどうやら医者のようだ。

「怪我だらけじゃないか、すぐに病院へ行こう」

医者に担がれ俺は一人が乗つていたと思われる一台の車に運ばれた。

「君、名前は？」

本名を名乗ると一枚の紙に記入しているのを伺える。

「た、助かつた……」

安堵の表情を浮かべる俺。

「キヨン」

「は？」

「なんかキツネのお面被つた変な子が誰かと喋つてゐるのを盗み聞きしたのよ。キヨンってあなたの事？」

「……まあ周りからそう呼ばれている」

少女は俺の体を上から下へ下から上へと何回も繰り返し手を動かしている。

「えつと、名前は？」

「アタシはハルヒよ、よろしくね」

「ああ……よろしく」

單なる偶然か？ それとも、まさか……な。
続く。

全てがおかしいと思え、俺（周りからはキヨンと呼ばれてこる）は笑ってきた。

街から少し離れた村に運ばれてから一週間。

医者の助手をしている……ハルヒという少女。そして、街にいる本物の涼宮ハルヒ。

俺は今杖をして村の周りを歩いている。

両足を撃たれたせいでうまく動かすのが少々難しい。いつも霧で覆われている街とは違つて、青空が向こうまで広がっているのを確認できる。

特に目立つた建物も無ければ、人通りも少ないこの村でこの先どうするべきかを考えていた。

まずこの怪我を治さなければまた国木田達に狙われ殺されてしまうのは当然だ。

あいつは本気で俺を消すつもりだろう、そして古泉も隙あらば俺をこの世界から消そうとしている。

まったく、この世界もこの住民も創造主もおかしい。

「何一人で笑つていいのよ？」

白衣の姿で腕を組む少女、ハルヒはなんとも面倒そうに笑みを浮かべて現れた。

強気な性格だというのが人目で分かるほど表情に出ている。

なんとも艶やかな長い茶髪、整つた綺麗な顔立ち。迫られたら一気にその魅力に落ちてしまいそうだ。

「ちょっと考え方をしていたんだ」

「ふーん、頑張つてリハビリをしたり考えたりするのはいいけどさ、外へ出歩くのは危険だから気をつけた方がいいんじゃない？」

俺の状態と今の状況を知った上なのだろうか、真剣な眼差しで忠告するハルヒ。

「とりあえず診療所に戻りなよ」

「……そうする。これ以上死ぬ思いをしたくないしな」

俺の隣に並ぶとハルヒは、

「怪我人だから」

腰に手を添え一緒に歩いてくれるようだ。

「そりゃどうも」

近づくと花のよがないい香りがした。

意識をしていないつもりだが、どうも胸の鼓動が自然と速くなる。

俺とは違つて彼女はなんとも思つていいだろうな。

性別関係なく何人もの患者を診てきたんだから、慣れているだろう。

「まだ考へてるの？」

「これからのことを考え中だよ」

「怪我を治すことだけに集中しなさいよ」

「へいへい……」

診療所に戻ると俺は病室のベッドに腰を下ろし思いつきり深く息を吐く。

「男が疲れた顔をしない、アタシはしばりへ受け付口にいるから何かあつたら呼んで」

「はいはい、どうも」

病室から出て行くハルヒを俺は少しだが名残惜しく見送る。

こここの世界のハルヒだというのは分かつたが、こっちの方が落ち着いている。

大人びてているというか、冷静というか。

だが、容姿はハルヒそのものだ。

「はあ」

ベッドで仰向け状態になつて真つ白な天井を見上げる。

この世界を創造したハルヒともう一人の犯人とは誰なのだろうか。そもそもハルヒは自分に能力があることを自覚していないはずだ。今一番ハルヒに近いのは古泉だ、というよりあいつしかいなんじ

やないのか？

長門は黙り込んで消えちまつたし、この前同様実は古泉が長門を演じているのかもれない。

「……？」

病室の窓が小刻みに振動する音が耳に入った。
地震か？ 今にもガラスに亀裂が入りそうだ。

それを確認する為、俺が体を起こして杖に手を伸ばそうとしたときだ。

「みいつけたあああああーー！」

「はああーー？」

窓ガラスが突然勢いよく弾け、破片が飛び散る。

割れる音よりも耳障りな大声が鼓膜を壊すのではないかと思えるほどで、俺は驚愕する。

襟首を掴んできたそいつは迷彩服姿で真っ黒な覆面を被っている。

「キヨン！？」

急いで駆けつけてきたハルヒ。

「ハルヒ、ナイスタイミングウーー！」

「怪我人に何するつもりよ！」

襟首から手が離れ俺はそのままベッドへ倒れる。

「イテツ」

せっかく体を起こしたというのに……。

「こ、コノオ！」

どうもこいつは怯えているように見える。

ナイフを取り出してハルヒに襲い掛かるとしているのに弱腰だ。しかし、ナイフは危険だ。なんとか立ち上がるとするが体はちやんと反応してくれない。

「は、ハルヒ、危ないぞ！」

「……」

しかし、ハルヒは黙つて相手を見ている。

おいおい、逃げないのか？

「ハルヒ！」

ナイフがあと数センチで刺さるといつといひでハルヒは軽やかに横へ回避。

「あれ？ おおうー？」

ハルヒの出した片足に引っかかるとナイフは手から離れ相手は一瞬空中に浮く。

相手の頭に手の平を乗せたハルヒは容赦なく床に叩き落す。あれは痛いどころじゃ済まないだろ？

「あんた誰？」

覆面を強引に脱がすとハルヒは首を傾げて、氣絶している相手を見下ろす。

だが、俺はすぐに分かった。

「谷口！？」

まさか谷口もこの世界にいたとは……。

しかしながら迷彩服なんか着ているのか。

「あんたの知り合いなの？」

「まあ一応な」

「とりあえず事情は説明してもらわないと」

ハルヒは何を思ったか谷口の顔に蹴りを、それも痛い痛い。

「うう……」

目を覚ました谷口は、俺とハルヒを交互に見上げている。

「谷口、だよな？」

「あ、ああ。そうだよ」

床に座り込んで不機嫌な様子の谷口。

「俺を覚えて……ないよな」

「？」

谷口が俺のあだ名を呼ばない。

胸の奥で、俺の気持ちを共感してくれるやつはこの世界にいないと思っていたが、今まで確証できた。

自然と俺は肩を落としてしまった。

「で、あんたは何でこんなことしようと思つたわけ？」

「はあ、俺らのボス朝比奈さんが帰つてこないからもしかしたら誘拐されたかもつて思つてよ」

「朝比奈さんが！？」

「なるほど、谷口はアベレージだつたのか。

「ふーん、キヨンがその人を誘拐したと」

「そうだよ、最後に朝比奈さんが姿を消したのはお前に会つに行つた日だからな」

俺と別れたあとに何かあつたんだろう。

探し方�이いかもしれないが、今の俺じゃ何にもできない。

「だつたら村の近辺はアタシが探すわ、谷口だつけ？　ここにあんたのボスはいなから帰つて」

「は？　ええええええ！？」

谷口を窓の外に放り出したハルヒ。

「一人で探すつもりか？　さすがに危ないだろ」

「それに問題でもある？」

ハルヒが白衣を脱ぐと、俺は口が閉じなれなくなつた。

白衣で隠れていた黒いセーターに強調された豊満な胸。短い灰色のスカートと細い脚の肌を隠す黒いタイツ。

なんとも触れてみたい気持ちになる。

駄目だ、変な妄想が勝手に流れてくるぞ。

「隣に別の病室あるからそこに移つた方がいいわね」

俺の下心満載な妄想を知る由も無いハルヒは杖を差し出す。

ベッドから立ち上ると補助をするように俺の横につくハルヒ。

「……」

俺が緊張しているのに気付いていないハルヒは、

「最近怪我人も少なくて入院する患者もいないから全然使ってないのよ、特にこの部屋」

隣の病室を開けて蛍光灯の明かりを照らすスイッチを押す。

「気のことないだろ関係ない俺を助けてくれたんだ。文句なん

てない」

「あ、そり」

ベッドに座り俺が一息つくと、ハルヒは前で腕を組みながら笑顔になる。

「？」

何かおかしかったのだろうか。

「じゃあ、ちょっと外を見てくるから寝てて」

「だからハルヒ危ないって、うお！」

急に体を押された俺はそのままベッドに倒れてしまう。

「あいたつ」

撃たれた部位全てに電撃のような痛みがはしり、俺は思わず口から素直な感想が漏れる。

目を閉じてこの痛みに耐えようと集中させるが、その命令は聞いてくれないようだ。

「あんたに言われたくない。怪我人に心配されちゃ意味ないのよ」

ハルヒの声がかなり近くで聞こえる。

いい香りが漂う。柔らかな感触が俺の胸元に付く。

目を開けると、

「えつ！？」

大きな瞳が微笑んだまま俺を捉えていた。

「とにかく、ここで休んでて」

呟かれるごとに吐息がかかる。その吐息に俺は自然と頬を熱くさせ、全身の体温が上昇していく。

麻酔にやられたような気分だ。

ハルヒの体が離れていくと熱が冷めていった。

いやあ、もうちょっと密着した状態でも俺はいいんだが。

「……あれ」

ハルヒはもう出掛けたようだ。

一人で勝手に興奮していたことが急に恥ずかしくなる。

盛り上がった一部に俺は深いため息を吐く。

あいつはハルヒだ。かの有名な涼宮ハルヒなんだ。
なのになんで俺は興奮している?

ただ中身が違うだけでこうも変わるとは……。

「何やってんだよ俺は」

それから一時間は経つただろうか、俺は眠れずあのハルヒが心配になってきた。

村の周りならあまり時間はかからないはずだ、なのにまだ帰っこない。

「……」

いつの間にか手に取った杖、俺はベッドから起き上がる。
さっきまで横にいたハルヒがいない為か少し不安定だ。

少しふらつきながらも診療所から抜け出しても、やっぱりハルヒの姿は見えない。

村の出入口には門があり、その近くにはなんとも深そうな森がある。

それ以外は特に目立ったものはない見渡しのいい場所だ。
だとすればこの森しかないだろう。

入つてみると足場は悪くない、深緑の木々から差し込む太陽の光が自然を輝かす。

空気もいいし深呼吸しても全く問題ない。

そんな自然に見惚れないと前からリズムの速い軽快な足音が聞こえてくる。

「！ キヨン？」

「よかつた、無事だつた」

ん？ 今俺は安心したのか。

こいつはハルヒだ。何があつても大丈夫なんだ。

確かに心配はしたが絶対大丈夫だという自信があった。

「村の外に出るなんて一体何を考えているの？」

どうやら怒っている様だ。

「そりゃあ、心配だつたんだよ」

「……ここには誰もいなかつたわ、さつやと帰るわよ」

「そう言いながらも俺の横につくハルヒ。

そろそろこの状態にも慣れてきた。

ハルヒが隣にいるといつ当たり前の光景だ。

そう、当たり前の……。

「？ 誰かいる」

ハルヒが俺の腕を握り締めて動きを止めてくる。

「どこにだ！？」

まさかＳＯＳ団なのか？ 国木田のやつ、まだ諦めてないのかよ。

「動くな」

「！？」

俺達の前に現れたのはキツネのお面で顔を隠す見知らぬ人物。長門に似ているが、何か雰囲気が違つ。

「偽者を殺せとの命令。涼宮ハルヒの偽者を排除する」

「涼宮ハルヒ？ 誰よそれ」

殺そうと構えている相手に余裕の表情で聞くハルヒ。

「答える必要はない。来い」

左手を空に向かつて伸ばしたと思えば俺達を囲むように現れたキツネのお面をつけた集団。

「おいおい、冗談じやないぞ」

まだ怪我も治つていないのに、死ぬ思いをまたしなくちゃいけないのか。

「その男は殺すな」

今度は左手を前に突き出す。

「キヨン、あんた何者？」

「それはあとで説明するから逃げるぞ。これはさすがにやばい」

「……やれ」

くそ、一斉に襲い掛かってきたぞ。

「やめろ！……」

杖で払おうとしてもここつらの動きが速すぎて回避されてしまう。

「……」

「人のキツネ面が俺のすぐ前に現れた。

「ぐう！……？」

相手の肘が見事に俺の腹部へと入り込む。なんという力だ。体が浮いたと思えば近くの木まで吹き飛ばされてしまった。

「げほげほ、おえつ！」

涙目になるくらいの吐き気と痺れるような痛みに動けない。「キヨン！！」

ハルヒへと視線を向けるとどうやら刺されではないようだ。むしろハルヒが謎の集団を蹴散らしているようにも見えた。武器を奪つては、相手の肩や膝に突き刺している。医者の助手にしては遠慮のないやつだ。

ハルヒは基本足を使って相手を崩し、そのまま地面に叩き落したり投げたりとなにやら武術を心得ているのだろうか。「予想以上に手強い……退散しろ」

指令を出していたキツネ面の一人は左手を握り締める。すると、刺された部位から武器を抜き取るという異常な行動。「なつ！？」

「あんた達失血するわよ」

ハルヒの注意に反応せざ去つていった集団。

あつという間に騒然としていた空気は消えていき、静けさが元通りになる。

「キヨン、平氣？」

「ああ、なんとか」

しゃがみ込んでは俺の腹部に触れ、痛みと外傷の有無を確かめる。

「ホントに大丈夫そう、はあよかつた」

「えつと、心配してくれるのか？」

「それは……当然じゃない。怪我人なんだから」

そうかい、初めて彼女が赤面する姿を見た。

俺が笑みを浮かべてそんなハルヒを眺めていると、彼女はそれ以上に笑顔で俺を立ち上がらせる。

「あ、今度じゃあさつと行くわよ」

「へいへい」

またそう言いながら、俺の歩幅に合わせて横についてくれる。

ハルヒのようではハルヒじゃない。

偽者……か。この世界は涼宮ハルヒが創ったのだから全てがきっと偽者なんだろう。

元の世界に戻るとき彼女は、この世界のハルヒは消えるのだろうか？

だったら、これ以上彼女と干渉しないようにしなければいけない。簡単じゃないな、この世界もハルヒも全て……。

第十一話（後書き）

かなり遅くなりましたが読んで頂ければ幸いです。

「キヨン、だいぶ調子いいみたいね」

この世界に来てもう一ヶ月ぐらいだろうか、俺（周りからはキヨンと呼ばれている）はこの世界に存在するハルヒと外を散歩している。

やれやれ今回はやけに長いじゃないか、前みたいに場が変わることもない。

本当のハルヒが近くにいるのに大きな怪我で会うことじゃ、捕まえることさえできない。

掴んでも彼女は逃げていく、古泉が、国木田がいる限り。あいつらをなんとか説得しないと駄目なかもしれないな。

「杖なしでも歩けるし、でも前みたいに変なのに襲われたら大変だから折りたたみの杖とか必要ね」

俺の手を掴むハルヒ。

「街に戻るなら先生にまた送つてもらえるよう頼むわよ
「いや、まずは朝比奈さんを探さないとな」

ハルヒは首を傾げる。

何故その必要があるの？ とでも言いたげな表情。

「仲間は多いほうが良いだろ？ 俺一人で行つても死んだら意味無いからな」

「そう」

「！」

突然指を絡ませてきたハルヒ。

照れている様子はない、当然のよつと絡む指へと俺は目線を動かした。

「……」

近づいたら駄目だ、これ以上は駄目なんだ。
不安になるだろうが、逆に。

「なあハルヒ」

「何よ?」

「命、あのキツネ面集団に狙われてるんだから、村が危ないんじやないのか?」

「アタシを殺す理由が見当たらない、勘違いよ」

「なんと前向きな発言。是非とも見習いたい。」

しかしキツネのお面を被つた集団は長門と格好は似ている。

同じ集団の仲間なら長門はどういうつもりだ?

あいつだけは単独で行動しているし、俺の周りで起きることを全て予知してはそこにつく導く。

考えてみると、今までの行動は涼宮ハルヒと会えるから長門の言うことを信じてきたつもりだ。

そうすればするほど、確かに会いつはいるがその度距離は遠くなれる。

酒場に行つても、拷問に耐えても、国木田に殺されそつこなつても、結局は彼女と離れていく。

それが目的だとしたら、長門は……。

「キヨン?」

腕を引っ張られ俺は意識をはつとさせる。

「考え事してる暇があつたらさ、今の状態をもつと良くするのに専念したほうがいいんじゃな?」

「こじまじらぐ、同じようなことを言われているような気がする。」

「そうだよな」

「そうよ、そうすれば探してくる人、すぐに見つかるかもよ

「だよな」

「そうそう」

一応彼女には今までの経緯を説明したつもりだ。

涼宮ハルヒのことも伝えたが、ただそつくりさんとこつ認識しないだろ?」

「さあ、散歩は終わりにして診療所に戻るわよ

「へいへい

もう横につくことをしなくなつたが、俺より少し後ろで見守る形でいる。

治ればハルヒともつと距離を置けるはずだ。

診療所に戻ると、入り口で医者が待つていた。

「ハルヒ、怪我人が運ばれたんだよ、手伝ってくれないか？」

「当然、手伝うわ」

怪我人が運ばれた割にはやけにのんびりした感じだ。

「……」

病室に入れば、俺は黙り込む。一息つきたいといつたのに……。

「長門、今度は何をしにきた？」

キツネのお面で顔を隠す長門。

ローブに身を包んで容姿がわからないが、この雰囲気は確かに長門だ。

「朝比奈みくるの居場所を教える」

「……」

「朝比奈みくるは今我々組織が預かっている。貴方一人で森に来てそうすれば返す」

「……で、あのハルヒを殺すつもりか？」

「偽者は排除しなければ貴方にも世界にも悪影響を及ぼす」

「どういう影響が出るんだよ」

俺はベッドに腰をおろしながらも長門を視界から離さない。

「困るから」

「は？」

「……」

長門は霧のように消えていった。

「おい、長門！」

もつとわかりやすく言つてくれよ。

「困るからつて、なんだよ」

俺はベッドに背中を密着させる。

「うちが困るんだよ、そういう理解できない答えなんて望んでない。

全てを明白にしてくれ、そして元の世界に帰る。

「……」

朝比奈さんを助けるには一人で行かなくちゃいけない。
そうすれば引き換えにハルヒを殺しに来る。

一緒に行けば朝比奈さんが殺されるのだろう。

偽者を見殺しにして朝比奈さんを助けるのが賢明なのか?
そんなわけない。

「キヨン」

「? ドゥモ」

また考へていると、ドアを叩く音にハルヒの声が聞こえてきた。

「キヨン、部屋の明かりくらいつけたら?」

「ああ、忘れてたな」

天井の蛍光灯が一瞬にして白く点灯する。

慣れない光に俺は思わず目をきつく閉じた。

「そうやって寝転んでたらそうなるわよ」

楽しそうな声、俺は半目で横を向く。

「朝比奈さんの居場所がわかった」

「あんたは寝てたら全部わかつちゃうの?」

「ま、そんなどころだ。しかも俺一人で行かなきゃならない。その間に……もし」

腕を前で組む勇ましい態度のハルヒ。

細めた目に映る穏やかな表情は余裕にも見えた。

怪我人に心配されたら意味が無い、か。

「朝比奈さんを助けたらすぐにアベレージに協力を求めて、あいつらをなんとかしないとな」

俺の言葉に満面の笑顔で、

「そうと決まれば即出発、あんたの命は狙われてないから大丈夫でしょ」

「ああ」

ハルヒに背中を押されながら、診療所の外へ。

村の出入口で見送るハルヒは俺のように名残惜しさもない。そうやって割り切れるその性格。羨ましい限りだ。

「ありがとうな、色々手伝つてくれて」

「怪我入だもの入院している間は当然できる」とはする、でも今度は患者として来ないでね

またねと、言う彼女に俺は笑つてしまつ。

軽く握手を交わすつもりだつたが、ハルヒの手が強く握りしめて

いる。

必ず再会できるようにそんな思いが感じられた。

「じゃあな」

「じゃあな」

背を向けて森へと足を進める。

杖なしで歩けるようになつたし、走ることもできる。

俺は振り返ることなく森へと歩く。

相変わらず緑が生い茂る自然の森は空気もいし体が軽くなるな。

「……」

足場も悪くない平坦な道のり。

決してここを通行するような人はいないが、人が通れるように道が広がつていて。

人工的な物はない、草木だつて手入れなどされていない。
分かれ道もない一本の通路をただ信じて進むと、

「！」

キツネのお面で顔を隠している長門の姿。

その隣には体を震わして長門にくつつく可愛らしい朝比奈さんがいた。

「約束通り、朝比奈みくるは解放する」

「ひやあ！」

長門に背中を押されこちらに翻け足でやってきた朝比奈さん。

「キヨンくん」

泣きそうな表情で俺の後ろに隠れる。
どうやら無事だったようだ。

「……」

「こり、長門……」

また、霧のよじに消えてしまった長門。

「くそ、なんだよあいつは……」

まだ詳しいことも聞いていない。目的も、涼宮ハルヒの行動も全部。

「……キヨンくん、ありがとうございます。」

「いや、俺は何もしてないですから、それより大丈夫でしたか？」

「はい、長門さん達はなんだか忙しそうでしたので」

長門は何か急ぐようなことをしているのだろうか。

「朝比奈さん、早速なんですがアベレージに案内してもらえますか？」

「あ、はいこの森を抜けますので村とは反対側になりますけど……
街から遠ざかりますけどいいですかと付け足される。」

今は構わない、それよりも俺にも仲間が必要だ。

「行きましょう、ハルヒを探すのに協力をしてほしいんです」

「……わかりました」

さらに森の奥へと一人で進み始めると、俺は振り返りそうになつた。

「……」

近づいたら駄目だ。想いも通わせて駄目だ。

俺は体を前に無理にでも進ませた。

今度こそ、涼宮ハルヒを掴んでやる。

長門の通りにもさせない、古泉の通りにもな。

絶対、皆で元の世界に戻るんだよ……。

第十話（後書き）

おひじくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0802p/>

涼宮ハルヒのSOS団

2011年10月16日18時04分発行